

# 小学校音楽科における 視唱力の育成に関する実証的研究(1)

— 広島市立Z小学校第3学年の授業実践より —

## An Empirical Study on Developing Sight-singing Ability in Elementary Music Classroom (1): Through Classroom Practice of Third Grade in Hiroshima City Z Elementary School

緒 方 満

Mitsuru OGATA

The purpose of this study was to clarify what transformations were observed in children's sight-singing ability through the practice of an exercise to develop sight-singing ability in elementary music classrooms. The exercise in this study introduced body movements to imagine pitches and to strengthen the memory of the pitch "do" (C4), referring to the eurythmic music teaching approach. The exercise was practiced 15 times for nearly two months by all the third-grade children of Z elementary school (N = 78) in Hiroshima City, and practical music tests were conducted thrice to clarify transformations in sight-singing ability. Results showed improvement in children's sight-singing ability and the effects of exercise practice.

### 1 問題の所在

小学校音楽科における視唱力の育成は重要である。本研究で扱う視唱力とは、譜例1に示す簡易な楽譜を見て、無伴奏つまり独力で即座に正しい音高で歌える歌唱力のことである。言い換えれば、2017年3月に告示の新小学校学習指導要領音楽科第5学年及び第6学年（2内容A表現(1)ア）に示された「範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能」のことと捉えられる。



譜例1

この視唱力が低い人は、歌を繰り返し聞き覚えて丸暗記で歌うことは可能であるものの、自ら独立して未知の曲を歌ったり、合唱といった高次の歌唱活動は困難になる。また、楽譜に示された音符から音高を解釈する機能が欠けているピアノ初心者には、打鍵時における音高の誤りが改善されないとい

う報告もある。つまり、視唱力とは、他教科の例で言えば国語科のひらがな・かたかな・漢字の読み書き、算数科の九九に匹敵する、音楽科における基礎的な学力と筆者は考える。

さて、音楽科における視唱力の状況はどのようになっているのであろうか。吉富ら（2008）は、347名の中学1年生を対象とした音楽能力の実態調査を行い、一般的な中学1年生、すなわち音楽科授業を唯一の音楽学習機会とする中学1年生の階名で聴唱・視唱できる能力、および歌詞を付けて視唱できる能力が非常に低いことを明らかにした。

吉富調査の課題の一部は譜例1を視唱するものであった。表1に、この課題の調査結果を、つまり対象者347名の得点を平均で音楽の習い事経験有無別に示す。

得点は満点が5.00（最低点1.00）で、音楽の習い事未経験者の得点は1.82と非常にひくいものであった。吉富は、「一般的な中学1年生が小学校学習指導要領に示された水準を悲惨な状況で達成していなかった」と言及している。したがって、視唱力の育成に関するこの問題は、小学校音楽科が抱えた早急に解決されるべき重要な課題であると考えられる。

表1 吉富らの階名視唱調査の結果

習い事未経験者 (n=144)	平均 (SD)	1.82 (0.70)
習い事経験者 (n=196)	平均 (SD)	3.22 (1.00)

(習い事経験の有無が不明の7名はデータから除外)

## 2 研究の目的

### (1) 視唱力と「音高認識体制」

小学校音楽科における視唱力の育成は、なぜ上記のような問題が生じているのだろうか。おそらくさまざまな要因が複雑に絡み合っているのではないかと想像できる。例えば、音楽科授業では視唱力などの音楽能力の育成よりも、児童たちが楽しさを実感できる音楽活動の展開が高く評価されがちである。あるいは美しい合唱などが実現できればそれでよいと考えている音楽科教育もあるであろう。このように音楽科という教科は、音楽的基礎的能力の育成がないがしろにされがちな傾向を有する側面があると言えよう。また、別の観点から言えば、我が国の児童・生徒すべてを対象にした学校教育制度の一環としての音楽教育体系という特徴をもつ音楽科教育において、児童への視唱力育成のための指導方法も音楽教育プログラムも実は未だ確立されていないということがあげられる。

現在、筆者らは、望ましい指導方法や音楽教育プログラムの開発に向けて、研究を継続・展開しているところである。筆者のこれまでの研究経過において、最も困難を感じてきた問題は、視唱力が非常に未熟な児童たちの視唱力を向上させる確かな指導方法がなかなか見いだしにくいことである。

ところで、視唱力が未熟な人は、成人・児童の区別なく、彼らの内面に形成されるべき「音高認識体制」が著しく脆弱なままである、と筆者は考えている。「音高認識体制」とは、音の高低に関する音楽能力と音階などの楽典的知識との双方で構成された人の内面に形成されることが可能な認識システムのことでありと捉えている。そして、視覚から得られた音高に関する情報からの音高再生である視唱力は、「音高認識体制」の関与が大きいと考えている。

大学生12名を対象者として、エクササイズ実践と調査を行ったところ、音高に関して著しく未熟な者は音高に関する記憶機能に主要な問題を有することが分かった。音高に関する記憶機能は「音高認識体制」の主要部分と考えられる。つまり、音高に関する記憶機能に問題が無くなり円滑になれば、「音高認識体制」はより強固になり、同時に視唱力も向上するのではないかと考えられる。したがって、視唱力が未熟な児童の改善には、音高に関する記憶機能を円滑にすることによって、「音高認識体制」を成長させるような指導法を開発し導入すること、が有効ではないかと考えられる。

## （2） リトミック音楽教育法を参考にしたエクササイズ実践

そこで、音高に関する記憶機能を円滑にし、「音高認識体制」を成長させることが期待できる指導方法の開発を進めるために、エミール・ジャック＝ダルクローズが考案したリトミック音楽教育法に着目した。著名な音楽教育家エミール・ジャック＝ダルクローズが提唱するリトミック音楽教育法は、リズム運動領域、ソルフェージュ領域、即興領域からなる体系的なものである。学習者が音やリズムに対して即座に身体反応していくことが重要な特徴の1つである。身体反応をさまざまなバリエーションで反復しながら音楽的な感覚を学習者の内面に蓄積していく。やがてその感覚が音楽能力に自然に変換するという考え方である（塩原2009）。

一連の本研究で従来から用いられてきたエクササイズ実践は、4分音符3つと4分休符1つの3音からなる音パターンを学習者に提示し、学習者がその音パターンを階名聴唱や階名視唱で応えるものである。実践では《提示→聴唱・視唱》が往還的に5分程度繰り返される。リトミック音楽教育法を本研究におけるエクササイズ実践に参考にした部分は、第1に、階名聴唱や階名視唱で応えると同時に、提示する音パターンの音高の動きを、補助的に片方の腕を連動させて上下動させること。つまり、腕の上下動という動作によって音高の変化に身体反応させ、音高の変化に関するイメージを強く認識させることである。このことによって、「音高認識体制」の成長が促進されると期待できる。第2に、「ド（C4）」の音高の記憶強化を徹底することである。リトミックでは、「ド（C4）」の音高の記憶が非常に重視される。音パターンの提示は、常に「ド」を意図的に開始音に多用して行ったり、学習者に不安定や混乱が見られた際には「ド」に立ち返りながら進めるようにする。このことが、「ド」の音高に関する認識体制を強くし、他の音高の認識体制にも効果的に作用すると想定した。

本研究の目的は、小学校音楽科における視唱力育成のためのエクササイズ実践において、リトミック音楽教育法を参考にした上記2点を導入することによって、児童の視唱力にどのような変容がみられるかを明らかにすることである。

## 3 研究の方法

### （1） エクササイズ実践

広島市立Z小学校第3学年全児童（全3クラス 計78名）に、本研究用に独自に開発した視唱力育成のためのエクササイズ（以下本エクササイズ）を実践した。実践はZ小学校音楽専科女性教諭が担当した。女性教諭は、歌唱指導では定評のある優れた音楽教師である。視唱力の育成に特化した今回のエクササイズ実践は初めての取り組みということであった。実践期間は約2箇月間にわたり、通常の音楽科授業において1クラスあたり計15回程度実施された。本エクササイズは、45分授業の指導過程に組み込まれ、授業導入部分の発声練習・既習曲歌唱に続いて本エクササイズが5～10分間実施された。

本エクササイズは、4分音符3つと4分休符1つからなる音パターンを授業者が電子ピアノで提示し、児童がその音パターンを階名で応答唱するものであった。なお、実践は特に次の2点に注意が払われた。第1は、必ず「ド」（C4）から始まる音パターンの提示で開始した。さらに、実践途中で混乱や停滞が生じたら、再度「ド」（C4）から始まる音パターンを提示した。これは、児童に「ド」（C4）の記憶を固定化・強化するためであった。第2は、児童が音パターンを階名で応答唱する際、応答唱に音高を表現する身体反応をしばしば付加させた。身体反応は、リトミック音楽教育法を参考に、音高をイメージ化した右手あるいは左手の上下動、または前進・後退歩行であった。これは、《音高知覚→音高弁別→音高記憶》をスムーズに機能させるために取り入れた。

表2 エクササイズ実践の主な内容・留意点等および調査日

第1回調査日：2015年4月22日・23日			
4月	第4週	リズムのまねっこ（リズムの模倣）	
5月	第2週	手拍子で拍の学習（速さ・強さ・音色に着目して）	
	第3週	4分音符・8分音符・2分音符の学習（手拍子・輪になって歩く）	
第2回調査日：2015年5月20日・21日			
	第4週	音パターンの階名聴唱、拡大楽譜を見ながら階名視唱	
	第5週	音階唱の学習 全音と半音の把握（手の上下動を伴って）	
	6月	第1週	順次階名聴唱・順次階名視唱（手の上下動を伴って）
		第2週	3度の跳躍音程（3度の音程を手で示しながら）
	第3週	高い音域で階名聴唱・階名視唱（ピアノを使って）	
	第4週	フラッシュカードによる階名視唱（順次進行の上行下降）	
7月	第1週	ソラシドレの5音による階名聴唱・階名視唱	
第3回調査日：2015年7月14日・15日			

## (2) 調査

本エクササイズの実践を受けた児童78名に視唱力の変容がわかる音楽実技調査を計3回実施した。第1回調査は4月22・23日に、第2回調査は5月20・21日に、第3回調査は7月14・15日に実施した。音高に関するエクササイズ実践は、5月第4週から開始されたので、第1回－第2回は統制期間（学習未実施期間）、第2回－第3回は実践期間（学習実施期間）とみることができる。

調査は、Z小学校の通常の授業時間に、空き教室で個別に1人あたり30秒程度で行われた。調査は視唱課題を児童が視唱するものであった。この課題は、吉富らが2008年に中学1年生の調査で用いたものとはほぼ同一である。児童の視唱はすべてCD-2eに録音され、広島大学音楽教育講座所属の大学院生5名の評価者がその録音を聴いて5段階で評価した。5名それぞれの評価の平均値を各児童の視唱力の得点とした。評価の対象は、音高のみで、1小節単位で、小節毎に4箇所を採点した。



譜例2 調査で用いた視唱課題

### 《評価規準》

- 5点 すべて正確な音高で歌唱している
- 4点 ほぼ正確な音高で歌唱している
- 3点 正確な音高での歌唱もあるが不正確な音高での歌唱もある
- 2点 ほぼ不正確な音高で歌唱している
- 1点 すべて不正確な音高で歌唱している

## 4 結果および考察

表3に、対象者73名の得点を平均（SD）で、音楽の習い事経験有無別、調査回別に示す。あわせて、被験者間1要因（A：習い事経験有無）被験者内1要因（B：調査回別）分散分析ならびに多重比較

（ライアン法）の結果も示す。

回毎の平均を比較すると、第3回の得点が上昇している。第1回の得点と第3回の得点の間、および第2回の得点と第3回の得点の間には、顕著な有意差が認められる。このことは、視唱力の向上を示しており、エクササイズ実践の効果が認められると考えられる。さらに、今回の結果は、冒頭で示した吉富調査の中学1年生の得点をも大きく上回っている。つまり、エクササイズ実践を受けた第3学年児童は中学1年生よりも視唱力が優れているということになる。

表3 得点結果

		第1回	第2回	第3回
習い事未経験者 (n=43)	平均	2.02	2.02	2.40
	(SD)	(0.70)	(0.72)	(0.67)
習い事経験者 (n=30)	平均	2.96	3.16	3.30
	(SD)	(1.05)	(1.00)	(0.96)

A : (F(2,72) = 29.24, p<.000)    B : (F(2,72) = 14.27, p<.000)

主効果 第3回—第1回 : (t=5.24, p<.000)

第3回—第2回 : (t=3.84, p<.000)

第2回—第1回 : (t=1.41, n.s.)

表4に、得点層別人数を、音楽の習い事経験有無別、調査回別に示す。

表4 得点層別人数

		4.00以上	3.00以上 4.00未満	2.00以上 3.00未満	1.00以上 2.00未満
習い事未経験者 (n=43)	第1回	0	5	17	21
	第2回	0	4	17	22
	第3回	1	8	26	8
		4.00以上	3.00以上 4.00未満	2.00以上 3.00未満	1.00以上 2.00未満
習い事経験者 (n=30)	第1回	6	8	9	7
	第2回	6	10	9	5
	第3回	8	10	9	3

得点層別人数をみると、習い事未経験者における1点台の層が大幅に減少していることがわかる。22人が8人に減少している。このことは、エクササイズ実践が非常に未熟な児童に対して効果があったことを示している。

本研究は、通常の音楽科授業においても視唱力の向上が実現できるという、音楽科にとって有益な結果を得ることができたと考えている。また、本研究の一連の手法は、客観的に非常にとらえにくい視唱力の変容をどのようにとらえるか、と言う研究的視点からも、その方法を提案するものと考えている。

今後の課題は、さらに効果の高いエクササイズ実践の開発である。多くの多種多様な小学校で実践と調査を積み重ね、視唱力を育成するエクササイズの検証を継続していきたい。

## 《引用参考文献》

- 吉富功修他（2008）「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1)－中学校入学時の音楽学力の実態を中心として－」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』第36号, pp.145-154。
- 緒方満他（2006）「児童の「音高認識体制」を成長させる音楽科学習指導方法の実証的研究－「2声部の歌い分け」をめざしたエクササイズアプローチの検証－」『日本教科教育学会誌』第29巻3号, pp.19-28。
- 緒方満（2010）「音高認知機能と音高に関する音楽能力との関連性－大学生に実施したエクササイズ実践と音楽実技調査をもとに－」『比治山大学現代文化学部紀要』17号, pp.103-114。
- 塩原麻里（2009）「ジャック＝ダルクローズのリトミック－「聴くからだ」と「演奏するからだ」をつくる音楽教育の基礎として－」『音楽教育実践ジャーナル』vol.6 no.2 日本音楽教育学会, pp.55-62。

## 〈キーワード〉

小学校音楽科, 視唱力, エクササイズ実践, 音楽実技調査, リトミック音楽教育法

緒方 満（現代文化学部子ども発達教育学科）

（2017. 10. 30 受理）